

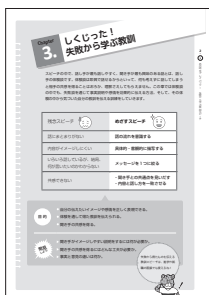
Chapter 3. しくじった！ 失敗から学ぶ教訓

<自分が体験した失敗を語り、その失敗から得たことや教訓を伝えるスピーチ>

学生の多くはあらゆる場面で体験談や思い出を話す機会があります。自分が体験したことなので、話し手は話しやすいのですが、聞き手としては「説明がわかりにくい」「思いや感情が伝わらない」「結局、それがどうした？」という3大ストレスに見舞われます。この章では、身近な思い出や体験談を通して、自分の伝えたいイメージや感情を聞き手になるべく正確に表現をし、共感を得ることを目標としました。

体験談の中でも失敗にこだわったのは、学生が話しやすいことと、聞き手への魅力です。聞き手にとって自慢話よりは失敗談のほうが親近感が湧きますし、ただの不幸自慢よりはそこからの起死回生に人は惹きつけられるためです。また、失敗から学ぶ教訓スピーチは、就職活動やアルバイトの面接にも有効です。面接官は学生時代に打ち込んだこと、失敗したときどういう対応をしたのか、そこから何を学んだのかを質問することで、学生の問題解決能力や柔軟性を探ろうとします。よって、教訓ネタを多く持っていれば、面接でアピールできる材料を増やすことができるのです。

学生の多くは失敗を恐れ、一步前へ出て挑戦することを避ける傾向が強いと思います。パラドクスになりますが、失敗から学びがあるかぎり、それは失敗ではありません。むしろ若いうちは失敗を多くしておくべきだと、教師の皆さんなら知っているはずです。ですから、このスピーチのクラスでも、たくさん失敗してもいいこと、恥ずかしいことではないことを強調しながら、学生の話す意欲を刺激してほしいと思います。



学習目的
★ 話の流れを意識する ★ メッセージを1つに絞る ★ 内容と話し方を一致させる ★ 自分の伝えたいイメージや感情を聞き手に正しく表現できる ★ 体験を通して得た教訓を伝えられる ★ 相手の共感を得る
時間管理（1回の授業を90分と想定）
1回目……………スピーチの準備 2回目以降……発表
発表形式
1人ずつの発表（各人3～5分）
準備するもの
① 失敗を連想させる写真2枚 ② 相互評価シート（発表者の人数×聞き手の人数） →このPDFのp.40

授業の進め方の例と注意点

● 1 回目 ＜スピーチの準備＞

順序	所要時間の目安	大まかな流れ	テキスト
0.	10～20分	アイスブレイキング・アクティビティ「ジェスチャーゲーム」 (翌週にまわしてもよい)	ヒント集限定！ 
1.	15分	ペアでアクティビティ（アイスブレイキング・アクティビティ） 「写真の説明エクササイズ」	p.42
2.	10～15分	ペアでワーク「失敗した出来事を思い出そう！（話題探し）」 (個人でワークも可)	p.43
3.	20～25分	グループでワーク「失敗について話し合い、質問し合おう！（話題の絞り込み）」	p.44
4.	10～15分	個人でワーク「スピーチ（3～5分）の準備を進めよう！」（宿題可）	p.46
5.	5分～残り時間	個人でワーク「ドラマチックな話し方でリハーサル！」 (ペアでワーク／グループでワークも可)（次週に回すことも可）	p.48
6.	残り時間	グループでワーク「リハーサル！」	p.49

0. アイスブレイキング・アクティビティ：「ジェスチャーゲーム」【10～20分程度】

目的	講義内または翌週の発表直前に、学生の緊張をほぐし、ジェスチャーをつけやすくする目的で、ジェスチャーゲームを盛り込むことを勧める。ここでは、伝言ゲームの要領で、あるワードを顔の表情とジェスチャーだけで次々に伝えていくゲームを紹介する。
手順と注意点	手順 (1) 教師が、感情を表に出しやすく、かつ、ジェスチャーのつけやすいワードをいくつか用意する。 [例] 高所恐怖症、合格発表、謝罪会見など (2) 4人1組のグループを作り、教卓に対して縦一列に並ばせる。 (3) 先頭(1番目)の学生以外は、後ろを向いて待機。教師は先頭にワードを見せる。 (4) 教師は2番目の学生のみを前に向かせる。教師の合図で先頭の学生は、2番目の学生にジェスチャーと顔の表情のみでワードを表現する。ジェスチャー時間は20秒。

(5) 次に3番目の学生に前を向くよう指示する。2番目の学生は、先頭の学生のジェスチャーから導き出されたワードを、3番目の学生にジェスチャーと顔の表情を使って表現する。ジェスチャー時間は20秒。

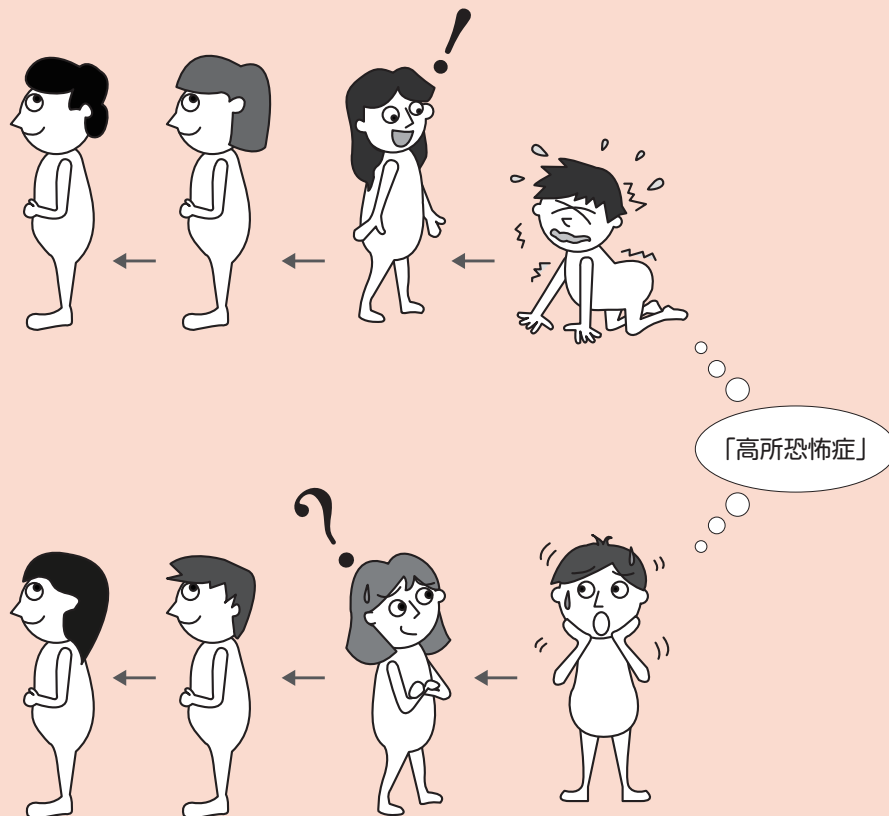
(6) 同様に、最後の学生までジェスチャーと表情だけでワードを伝えていく。最後の学生は、直前の学生のジェスチャーや顔の表情から、ワードが何だったか、1人ずつ答えを口頭で発表する。全員の答えを聞き終わったところで、教師が正解のワードを言う。

(7) 時間があれば、学生の並び順とワードを変え、複数ラウンドくり返す。1ラウンド約5分。

ポイント・注意点

- ※ 全員、言葉の使用は一切禁止にする。
- ※ 今回のスピーチでは、内容に合った話し方をすることが聞き手の共感を得る上で大事になってくるので、ワードに対する顔の表情やジェスチャーを大きく、はっきりつけることを強調する。

手順と注意点

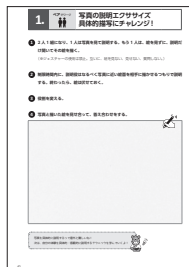


1. ペアでアクティビティ (アイスブレイキング・アクティビティ): 写真の説明エクササイズ [15 分]

ワークの目的

体験談に欠かせない描写の練習。自分の見ている風景を言葉にすると、相手にどのように伝わったかを認識させる。

テキスト p.42

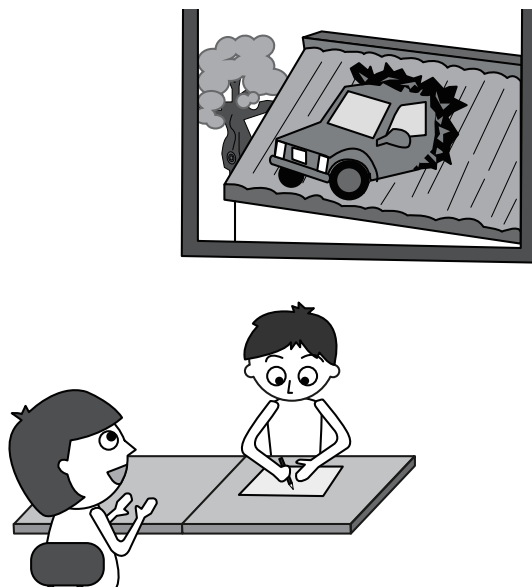


留意するもの

失敗を連想させる写真2枚

手順

- (1) クラス全体を、くじやトランプ、番号の割り振りなどで1グループ4人になるようにグループ分けをする。このグループでこの日の授業は協働作業をしていく。席は4人1グループ対面式にして座らせるといい。
- (2) エクササイズの進め方と注意点・目的などについて確認する。
- (3) 写真エクササイズでは、グループ内でペアをつくり、説明役と絵を描く役を決める。このとき、絵を描く役は、写真が見えないように、説明する役は、相手の絵を見ないように座る位置を調整する(図参照)。
- (4) 教師はスクリーンに写真を映す(または、説明役だけに写真のプリントを配布する)などして、タイマーで時間を計る。
- (5) テキストの手順(①～④)に沿ってペアでワークを進めさせる。
 - ① 説明役は相手になるべく写真に近い絵を描けるように説明する。絵を描く役はそれを聞いて描いていく。
 - ② 一方通行のスピーチと同じ条件にするため、説明役は相手の絵を見て説明してはいけない。絵を描く役は質問をしてはいけない。お互いにジェスチャーの使用は禁止。
 - ③ 制限時間(2分)を過ぎたら、絵は伏せておく。
 - ④ 役割を交代し、写真を変えて、①～③の作業をくり返す。
- (6) 最後に写真と描いた絵を一齊に見せて答え合わせをする。



ポイント・注意点

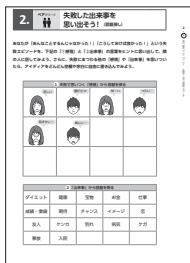
- ※ グループをつくるときは、普段一緒に座っている、または仲がいい学生どうしにならないように配置するのが望ましい。偏りのあるグループがあったら、教師が学生に移動を求める。
- ※ 写真は失敗を連想させるような写真（転倒、対物事故など）を選ぶ。
- ※ 写真を見せるときは、後ろの学生にも見えるように PC ソフトで大きく見せるのが望ましい。説明をスタートさせる前にまず写真で何が起こっているのか把握するために 10 秒ほど、準備時間を与えるとよい。
- ※ 説明役が写真を見やすいように、描く役は写真の中が見えないよう、かつ、絵を見せないよう、席の配置に注意する。
- ※ 学生が 3 人になってしまう場合、1 人が説明、2 人が絵を描く役にする。役割交代の際は、1 人が 2 回絵を描く役にしてもよい。
- ※ 答え合わせで、写真と絵が近いペアには、どんな説明の工夫をしたか、どんな説明があったからうまく描けたか、クラスでシェアさせてもいい。

2. ペアでワーク：失敗した出来事を思い出そう！（話題探し） [10～15 分] （個人でワーク也可）

ワークの目的

制限時間内で話せそうな話題を探る。

テキスト p.43



手順

(1) このスピーチでは、自分が体験した失敗を語り、最終的にその失敗から得たことやみんなへのアドバイスとしての教訓を盛り込むことを伝える。

- ※ 失敗談はいくつあってもよいが、それらの失敗から共通する教訓は 1 つに絞るように指示する。

(2) ワークの進め方と注意点・目的などについて確認する。

(3) テキストの手順に沿ってワークを進めさせる。

- ① 写真の説明エクササイズと同じ学生とペアで話し合いながら話題を探る。個人で行ってもよい。
- ② すぐに思いつかない場合、失敗から連想する「感情」や、事故や失恋などの「出来事」から探る。思いついた失敗談は、空欄や余白に自由に書き込む。

ポイント・注意点

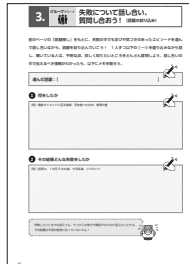
- ※ 経験豊富な教師による、数々の失敗談や、著名人の失敗談を具体例として挙げ、学生の話題探しのヒントを与えるとよい。
- ※ 自称「私、失敗しないので」という学生がいたら、「失敗していないことが失敗だよ」とやんわり伝え、危機管理能力を鍛えるためにも、受験や部活、子どものころや何かを初めてしたときの失敗などを思い出させる。

3. グループでワーク：失敗について話し合い、質問し合おう！（話題の絞り込み） [20～25分]

ワークの目的

話し合いながら話題を絞り込む。

テキスト pp.44-45



手順

(1) ワークの進め方と注意点・目的などについて確認する。全員が平等に話す機会があるように、1人5分を目安に役割を交代させる。教師はタイムキーパーになる。

(2) テキストの質問(①～④)に沿ってグループでワークを進めさせる。

- ① 選んだ話題について、話し手はどんな失敗をしたか、その結果どんなことが起きたか、そこから何を学び、聞き手への応用アドバイスは何か、順を追って話してみる。
- ② 聞き手は話を聞きながら、わかりにくかった点、もっと詳しく知りたい点、素朴な質問などをどんどん尋ねる。
- ③ 質疑応答の中で、話し手は話すべき情報を空欄にメモする。

ポイント・注意点

- ※ 学生の中には、メディアで聞くような大きな失敗を経験していないので、何を話したらいいか迷う学生もいる。ここでは、学生の人生の中で本人にとって学びがあり、それが相手にも役立つものであればよしとする。
- ※ 体験談は言えても、気づきや学びが言えない話題は、今回の発表には使わないようにアドバイスする。自分で気づきと言えても、学びがうまく言えない場合は、聞き手からアドバイスをもらったり、聞き手が失敗談から何を学んだか尋ねるとよい。
- ※ 教訓が他の学生とかぶっても、失敗の背景や結果の大きさは異なるので、安心して話すよう促す。トラウマになっているような深刻な話は無理にさせない。

4. 個人でワーク：スピーチ(3～5分)の準備を進めよう！ [10～15分]

ワークの目的

必要な情報を見極め、内容を充実させ、全体を整える。

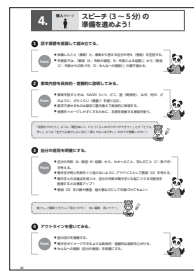
手順

(1) ワークの進め方と注意点・目的などについて確認する。

(2) テキストの手順(①～④)に沿って個人でワークを進めさせる。

- ① 話す順番を意識して組み立てる。体験談を話すときは「事実」と「意見」を区別することを確認する。今回の教訓スピーチでは、事実(A失敗の原因、B失敗による結果)と意見(C失敗からの気づき、Dみんなへの教訓)に分ける。
- ② 事実内容を具体的・客観的に説明してみる。事実説明のところで、情報の基本5W2H(いつ、どこで、誰(関係性)、なぜ、何が、どのように、どれくらい(数量)の要素が入っているかを確認する。必要に応じて、五感を使った表現(視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚)を足し、より具体的、客観的な説明を心がける

テキスト pp.46-47



よう促す。

- ③ 自分の意見を明確にする。この経験から「C失敗からの気づき」がいくつあるか、複数ある場合は「気づいたことは3つあります。1つ目は……」のように、番号を使って説明するよう指示する。次に、気づいたことから導かれる「Dみんなへの教訓」を一言にまとめるように指示する。このとき、自分の気づきを聞き手の学びへとつなげるために、特にどんな人に気をつけてもらいたいか、特にどんなときに注意が必要か、などの情報を話させる。それにより、聞き手に「自分にも起こりうること」として聞いてもらいやすくなることを伝える。

※ オプションとして、教訓を五七五の川柳や標語、流行語になぞらえる、替え歌などに置き換えてもよい。クリエイティブな締めくくりを奨励する。
オプションに挑戦したい人は、クラスメートの知恵を借りる。

- ④ アウトラインを書く。

話す順、具体的・客観的な事実説明、意見のポイントを押さえながら、3部構成に落とし込み、全体を整える。

ポイント・注意点

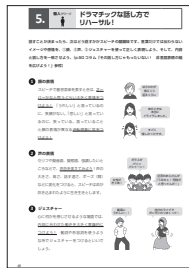
- ※ アウトラインは長い文章で書かず、箇条書きやキーワード、的確で簡潔な言葉で記入するよう指導する。そうすることでアウトラインの丸読みを避け、なるべく目線を聞き手に向けることができる。
- ※ 序論→原因→結果→気づき→教訓へと話題転換するとき、「まずはじめに」「次に」「最後になりますが」のようなつなぎの言葉を入れて、話の流れを聞き手がわかるような配慮をするように指導する。
- ※ スピーチの始まりと締めくくりは、しっかりと挨拶をするように指示する。
- ※ 本番でアウトラインの持ち込みを許可するか否かは、担当教員の判断とする。
- ※ 川柳や標語を視覚化して見せたいという学生がいる場合、後ろの学生まで見えるように大きい字で見せるよう指導する。
- ※ 聞き手の記憶に残すために、オプションをクラス全員で復唱させることを推奨するとよい。
- ※ 時間に応じて、この作業は宿題とすることも可。

5. 個人でワーク：ドラマチックな話し方でリハーサル！ [5分] (ペアでワーク／グループでワークも可)

ワークの目的

いかに自分の話し方がワンパターンかを認識させ、メリハリをつけて、話し方のバリエーションを増やす。時間管理を意識させる。

テキスト p.48



手順

(1) ドラマチックな話し方にする3つの要素について、各ポイントを説明する。

ポイント・注意点

※「①顔の表情」は、自分が思っている以上に大きく、はっきりつけないと、聞き手に真意が伝わらない。今となっては笑い話でも、そのとき感じた気持ちをストレートに表現することを強調する。体験談では、ポジティブな感情では顔が暗く、ネガティブな感情を笑顔で話す「逆転現象」が起きやすい。謙遜や照れ隠し、緊張が原因だが、これは誤解を生むことを説明する。

※「②声の表情」では、終始同じトーンで話さず、台詞、擬音語、擬態語や強調したいところで声の調子を変えると、生き生きしたスピーチになり、声色によって、言葉の意味合いが違って聞こえることを認識させる。例えば、「ごめんなさい」「ありがとう」などの短い言葉を、5つの声の要素がわかるように、①大きい声で／ささやく声で、②高音で／重低音で、③早口で／ゆっくりで、④アニメの声色で／車掌さんの声色で、⑤「ごめん」の後に間をおいて、教師が言ったあとに、学生に復唱させるといい。いかに自分の話し方がワンパターンであるかを認識させることができる。

※「③ジェスチャー」では、どこに動きをつければいいかわからないという学生がいる場合、動詞や形容詞、数字を使うような場面で動きをつけるようにアドバイスする。メッセージ性が強いトピックほど、熱意を含めたジェスチャーがつけやすくなる。ジェスチャーは大げさなくらい大きくつけると効果的であるが、動きっぱなしは落ち着きがないと見られ、逆効果になる。目安として、話の山場でジェスチャーをつけるように指導するとよい。

※ 共感を得るために、内容と話し方を一致させること、話し方にメリハリをつけることを強調する

(2) 非言語コミュニケーションに関するコラム「その話し方じゃ、もったいない！」(テキスト p.50) を読んでくるように指導する。

6. グループでワーク：リハーサル！ [残りの時間]

ワークの目的

いかに自分の話し方がワンパターンかを認識させ、メリハリをつけて、話し方のバリエーションを増やす。時間管理を意識させる。

テキスト p.49



手順

(1) ワークの進め方について確認する。

(2) テキストの手順(①～④)に沿ってワークを進めさせる。

- ① 同じグループで、話し手はアウトラインを確認程度に見ながら、話し方に変化をつけることを意識して1人ずつ練習する。
- ② 聞き手は、内容に合った話し方になっているか確認し、話が終わったら主に話し方において良かった点や改善点を指摘する。話し手は、聞き手のコメントをアウトラインに記入し、今後の練習に役立てる。

ポイント・注意点

- ※ 教師がタイムキーパーとなり、なるべく制限時間内に話が収まるように学生に促す。
- ※ 講義内で時間がない場合は、この作業を次週に回し、発表の直前に行ってもよい。

● 2 回目 <発表>

順序	所要時間の目安	大まかな流れ	テキスト
1.	10 ～ 15 分	発表前の確認事項	ヒント集限定！ 
(2.)		(個人作業「リハーサル」)	ヒント集限定！ 
3.	残りの時間	個人発表と相互評価	ヒント集限定！ 
4.	5分	宿題の確認	ヒント集限定！ 

1. 発表前の確認事項 [10 ～ 15 分]

目的

発表者と聞き手双方の心構えをつくる。

用意するもの

相互評価シート
[→ PDF p.40]
(発表者の人数×聞き手の人数)

タイマー

残り時間を伝えるカード

手順

(1) 発表のルールを説明する。

- ・ アウトラインを確認してもよいが、原稿は読まないこと。
- ・ 制限時間を確認する。制限時間より早く終わってしまった場合、制限時間を超えてしまった場合のルールを事前に決めておく。

(2) 相互評価についての指導。

- ・ 今回の学習目的を確認する。
- ・ 相互評価シートの空欄は、担当教師の必要に応じて評価項目を追加する。
- ・ 聞き手は発表中、話し手のほうに体を向けてしっかり聴くように指導する。スピーチが終わってから相互評価シートを記入させる。
- ・ 大切なフィードバックなので、発表をよく聞いて記入する。良い点だけでなく、気になったこともしっかり書いてあげることを確認する。
- ・ 誹謗中傷のような評価は書かないよう注意する。あくまでもどうしたら良いスピーチになるか、具体的に書くよう指導する。
- ・ 自由記入欄は、単語ではなく、文・文章で書くように指導する。
- ・ 内容に関する素朴な質問も記入してよい。
- ・ 相互評価シートは発表後に回収し、授業の最後に各発表者に渡す。回収は、スピーチを終えた直後の学生が、自分の 1 つ前に発表した学生の相互評価シートを集めるようにすると時間が有効に使える。(発表者はスピーチ後、自分の評価が記入されている間はすることがないため。) 一番目に発表した学生には、最後の学生の相互評価シートを集めることも伝える。

(3) 発表順を決める。

- ・ 発表順に、発表者名をホワイトボードなどに記入させるとよい。

(4) タイマー係、撮影係を決める。

- ・発表が2週にわたる場合、発表しない学生からタイマー係や撮影係を決める。

ポイント・注意点

- ※ 発表者のスマートフォンやデジタルカメラなどのデバイスで動画撮影を行う。教師が撮影してもよいし、学生に撮影係を担当してもらってもよい。
- ※ タイマー係には、「あと1分」「あと30秒」などと大き目に書いたパネルを持たせ、時間になったら話し手に見えるよう掲げる。または「チン」と鳴る道具を使って時間を知らせるなど指導。
- ※ 相互評価シートを回収後すぐに本人に渡すと、読むことに集中してしまい、次の発表者のスピーチを聞かないことがある。それを避けるため、回収後はいったん教師が預かり、全員のスピーチが終わってから手渡すとよい。その場合、回収後は教師に渡すように指示すること。
- ※ 基本的には、匿名で評価シートを記入させるが、誹謗中傷の防止策として評価者の名前を記入させてもよい。

(2. リハーサル [10～20分])

時間があれば、リハーサルを行う。Chapter1（PDFのp.16）参照。

3. 個人発表と相互評価

目的

発表と評価の実施。

手順

- (1) 1人ずつ前に出て、発表を行わせる。
- (2) 個人の発表終了ごとに、聞き手に相互評価シートを記入させる。その間に、教師は発表者に口頭でフィードバックを行う。
- (3) 話し手にはクラスメートから回収した相互評価シートを持ち帰らせる。

ポイント・注意点

- ※ 学生の人数が多い場合、発表は2週に分ける。
- ※ 各発表後に（発表者以外の学生が相互評価シートを記入している時間内）教師は発表者に対して個人的にコメントする（他のクラスメートに聞こえないように隅で行うとよい）。もしくは、教師から見た良い点や改善点をクラスで共有する形でもよい。
- ※ 発表直後の学生は、緊張からの解放により教師のフィードバックが耳に入らない場合がある。安静してから行うか、短いコメントに留めておくともよい。

- ※ まず、良かった点、頑張った点などのコメントを先にいくつか伝える。注意点を口頭で伝える場合は、最後に 1 つだけ伝える程度にするとよい。
- ※ 全員の発表が終わったあと、総評をコメントしてもよい。その場合は、良かった点と改善点の両方を伝えるようにする。
- ※ 留学生の場合は、日本語の誤用などについても適宜フィードバックを行う。

4. 宿題の確認【5分】

テキスト別冊

手順

- (1) 自己評価シート（**テキスト**の別冊）について説明をする。
- (2) 自己評価シートを記入し、翌週提出させる。
 - ・ 自分の発表体験やクラスメートからの相互評価シートをもとに、自己評価シートを記入する。
 - ・ 自由記入欄には、なるべく具体的な自己分析を記入する。

ポイント・注意点

- ※ 教師は自己評価シートにフィードバックなどを記入し、次回、返却する。
- ※ 自分の発表動画を見て、自己評価シートを書くときの参考にするように指示する。